

『120 分 de 法華経！』

vol.20 Nov. 2025

—— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 從地涌出品第十五』 (本門・序分 / 正宗分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん

者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』(法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』(方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』(法師品 二〇九頁三行))

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』(法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』(『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



<從地涌出品のあらすじ>

【十方分身仏と共にやって来た菩薩たちが、娑婆世界での広宣流布を誓う】——

【二五八頁一行】『安樂行品』で、末世の菩薩が法を説く際の心構えを世尊が説き終えられると、他の国土(十方の世界)から集まって来ていた八恒河沙(ごうがしゃ)を超える無数の菩薩たちが立ち上がり、釈尊に合掌して次のように決意を申し上げました。

【二五八頁二行】「世尊よ。もしお許し下さるならば、私共もこの娑婆世界にとどまり、/ (『是(こ)の經典を護持し、讀誦し書寫し供養せんことを聽(ゆる)したまわば、當(まさ)に此の土に於て廣く之(これ)を説きたてまつるべし』) 世尊のご入滅後にこの教えを護持し、讀誦して法を説き広めたいと存じますが如何でございましょうか」と決意を申し上げたのでした。

【十方世界の菩薩たちの広布の誓いを、釈尊が断る】——

【二五八頁五行】すると世尊は、その申し出をキツパリとお断りになったのでした。

『止(や) みね、善男子、汝等(なんたら) が此の經を護持せんことを須(もち) いじ』「善男子よ。その必要はありません。そなたたちがこの娑婆(しゃば) 世界で『法華經』を護持(ごじ) するには及びません。なぜならこの娑婆世界にはもともと六万恒河沙(ごうがしゃ) という数限りない菩薩たちがおり、その菩薩にはそれぞれ六万恒河沙(ごうがしゃ) の弟子を従えています。その者たちが私の滅後に『法華經』を護持し、説き広めてくれるのであります」とお応えになったのであります。

【本化の菩薩(待機・大衆唱導の首・地涌の菩薩)が大地から現われる】——

【二五八頁終二行】仏さまがそうお説きになったその瞬間、娑婆(しゃば) 世界全体が大きく揺(ゆ) れ動き、大地に割(わ) れ目ができました。そしてその大地の割れ目から無量千万億という計り知れない数の菩薩たちが湧(わ) き出して来たのでした。その菩薩たちは皆、金色(こんじき) に輝き、仏の徳相である三十二相を具(そな) え、得も言われぬ眩(めづ) り光明(こうみょう) を全身から解(と) き放(はな) っているのです。

【二五九頁一行】『先より盡(ことごと) く娑婆世界の下(した)、此の界の虚空(こくう) の中に在(あ) って住せり』この菩薩たちは、はるか昔より娑婆世界の下(した) の虚空(こくう) の世界に住んでいる者たちで、／『釋迦牟尼佛の所説(しよせつ) の音聲(おんじょう) を聞いて下より發來(ほつらい) せり』釈迦牟尼仏が『教化を任(まか) せる』とのお言葉を聞いて、こうして現われ出て来た菩薩たちなのです。

【二五九頁三行】この菩薩たちは大衆唱導の首・だいしゅしょうどうのしゅと言って、多くの人々の先頭に立って大衆を教え導く指導者です。それぞれ六万恒河沙(ごうがしゃ) つまりガンジス河の砂の数の6万倍の数の弟子を従えています。また5万倍、4万倍、3万倍、2万倍、1万倍の弟子を率(ひき) いている者が多くいます。それよりも多いのは、ガンジス河の砂の数と同じくらい、もしくはその半分、四分の一、千万億那由他(なゆた) 分の一の弟子を率(ひき) いている者です。またそれ以上に多いのは、千万億那由他(なゆた) の弟子を率(ひき) いている者、億万の数、千万、百万、一万、千、百、十人の弟子を率(ひき) いる者がさらに多く、そしてそれよりも五、四、三、二、一人の弟子を持つ者はもっと多いのです。さらには、たった一人で煩惱(ぼんのう) から離れた精進の道を願って歩んでいる者が最も多いのです。このように大地から湧(わ) き出て来た地涌(じゆ) の菩薩たちの数は無数で、数え尽(つ) くすることができません。その数の多さは理解することができないほど無数であります。

【二五九頁終三行】これらの菩薩たちが地中から現れると、次に虚空(こくう) へと飛び立ち、光り輝く七宝の多宝塔におられる多宝如来と釈迦牟尼如来のみもとに詣(もう) で二世尊のみ足(みあし) に額(ひたい) をつけて礼拝(らいはい) しました。そして無数の宝樹(ほうじゆ) のもとの師子座(しざ) に着座する分身仏(ぶんじんぶつ) のみもとにも詣(もう) で、その周りを右回りに三周して合掌して敬いの意思を表し、礼拝して讃歎(さんたん) 申し上げたのでした。そして、多宝如来と釈迦牟尼如来をじっと仰(あお) ぎ見るのであります。

【二六〇頁三行】 こうして地から涌（わ）き出て来た菩薩たちが諸仏を讃歎しているうちに、五十小劫（しょうこう）という大変長い時間が経（た）ちました。その間、釈迦牟尼仏は默然（もくねん）として端座（たんざ）されていました。／（『及び諸（もろもろ）の四衆も亦（また）皆（みな）默然（もくねん）たること五十小劫、佛の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂（おも）わしむ』）またその場にいた出家・在家の者たちも、菩薩たちが諸仏を讃（た）える様子をただ静かに仰（あお）ぎ見ておりました。その五十小劫（しょうこう）という果（は）てしない時間が、仏さまの神力（じんりき）によって一同には、半日くらいの短さにしか感じませんでした。

ほんげ しだい じょうしゅしょうどう し
【本化の四大菩薩<上首唱導の師>が、釈尊にご挨拶申し上げる】――

【二六〇頁七行】 その出家・在家の修行者たちは、仏さまの神力によって無量百千万億という無数の地涌（じゅ）の菩薩たちが虚空（こくう）に満（み）ちている尊い情景を目にすることができたのでしたが、その菩薩たちの中に四人の大導師がいました。上行（じょうぎょう）菩薩、無辺行（むへんぎょう）菩薩、淨行（じょうぎょう）菩薩、安立行（あんりゅうぎょう）菩薩という名の菩薩方（かた）です。この四大菩薩は【上首唱導の師（じょうしゅしょうどうのし）】と言って菩薩のなかでも最上位にある最高の指導者です。この四大（だい）菩薩は一同が仰（あお）ぎ見ているその場で、釈尊のみ前に進み出て、／（『世尊、少病少惱（しょうびょうしょうのう）にして安樂に行じたもうや不（いな）や』）「世尊よ、ご息災（そくさい）でお元気であられましたか。また世尊が人々を教化されるにあたり、お疲れはございませんか。そして導かれる者たちは、世尊のみ教えをちゃんと理解し、素直に受け止め、世尊にご苦勞とお手間を取らせてはいないでしょうか」とご挨拶を申し上げるのでありました。

【世尊が四大菩薩に返答。そして地涌の菩薩たちの因縁を説明】――

【二六一頁五行】 その挨拶を受けられた世尊は、次のようにお応えになりました。

「善男子よ。私は無事息災（ぶじそくさい）で大丈夫です。衆生の教化についても苦勞はなく、皆、素直に私の教えを受持しています。疲れはありません。なぜならば／（『是（こ）の諸（もろもろ）の衆生は世世（せせ）より已來（このかた）、常に我が化（け）を受けたり』）諸々（もろもろ）の衆生は、はるか昔の前世からずっと私の教化を受けているからです。／（『亦（また）過去の諸佛に於て供養・尊重（そんじゅう）して諸（もろもろ）の善根（ぜんこん）を種（う）えたり』）また、過去世より諸仏のもとで精進し、仏に対して供養・尊重（そんじゅう）して善い行いを積み重ねて来ている者たちです」

【二六一頁終四行】（『此の諸（もろもろ）の衆生は始め我が身を見、我が所説（しよせつ）を聞き、即（すなわ）ち皆（みな）信受（しんじゅ）して如來の慧（え）に入（い）りにき』）「ですから、今世において私に巡（めぐ）り合って初めて教えを聞いても、私の教えをたちまちに信受し、すぐに仏の悟りへの道へと入って行くことができるのです。しかし今世、／（『小乗を學せる者をば除く』）小乗の教えに触れてそれで十分だと思っている人とは訳（わけ）が違います。／（『我（われ）今亦（いままた）是（こ）の經を聞いて佛慧（ぶつて）に入（い）ることを得せしむ』）しかし私は、そうした『自らの救われ』だけで十分だと思っている人にも、この『法華經』をもって仏の智慧・眞の悟りを得る道に入れようとしているのであります」

【世尊のお答えに対して、四大菩薩が感動を申し上げる】――

【二六頁終二行】その時、四大菩薩たちは大いに悦（よろこ）び、世尊に申し上げたのでした。

「世に優（すぐ）れた大いなる雄々（おお）しい世尊である『大雄（だいゆう）世尊』よ。諸々（もろもろ）の衆生を教化することがご苦勞ではなく、容易（たやす）いことだと仰（おっしゃ）いただきましたことは大変有り難いことです。衆生が世尊に諸仏の智慧についてお尋ねすると、すぐ教えてください、すっかりと衆生がその教えを理解し信受するということは、なんと素晴らしいことでしょうか。私どもは大変有り難く、言い知れぬ大いなる悦びに包まれる思いです」

【二六頁三行】それをお聞きになった世尊は、菩薩たちの指導者格である【上首唱導の師（じょうしゅのし）どうのし】である上行（じやぎょう）・無辺行（むへんぎょう）・浄行（じやぎょう）・安立行（あんりつぎょう）の四大菩薩に向かってお褒（ほ）めの言葉をおかけになったのでした。

「よろしい。よろしい。善男子たちよ。よくぞ真の悦びをもって、如来に隨喜（ずいき）の心を起こしてくれました」

【四大菩薩や地涌の菩薩たちのやりとりを見ていた弥勒菩薩らは、疑問を覚え、釈尊に問う】――

【二六頁五行】するとこれまでの情景を目にしていた弥勒（みろく）菩薩と八千恒河沙（ごうがしゃ）という数えきれない無数の菩薩たちは、次のような思いを抱（いだ）いたのでした。

「私たちは昔から世尊にお仕（つか）えして今日まで精進してきたが、このような大菩薩たちが突然大地から湧き出て、世尊の御前（おんまえ）で親しくご挨拶を交わすなど、これまでに見たことも聞いたこともない。一体何故（なぜ）、このような出来事が起こるのだろうか？ 不可思議だ」と一同は疑問に思い、不審（ふしん）に思ったのでした。

【二六頁七行】その時弥勒菩薩は、八千恒河沙（ごうがしゃ）の数多くの菩薩たちが自分と同じ疑問を抱（いだ）いていることを察知しましたので、仏さまにお同（うかが）いを立てたのでした。

「この無量千万億という数えきれない菩薩たちは、これまでにお会いしたことのない方々ばかりです。世尊よ。四大菩薩や地から湧（わ）き出（い）た菩薩たちは、一体何処（どこ）から来られたのでしょうか？ また、どのような理由があってお集まりになったのでしょうか？ これらの菩薩たちはみな素晴らしい大神通力を具え持っておられるようにお見受けします。計り知れない深い智慧を持ち、堅固（けんこ）な意志と強い忍耐力を具（そな）えておられます。まさに世の全ての人々が、『お会いしたい』と願いたくなるような素晴らしい菩薩たちばかりです。世尊よ。これらの菩薩たちは、一体、何処（どこ）から来られたのでしょうか？」

【二六頁一行】「しかもそれぞれの菩薩には、ガンジス河の砂の数のように無数の弟子たちを引き連れています。ある大菩薩はガンジス河の砂の数の六万倍の弟子を率（ひき）いて、一心に仏の悟りを求め、仏を供養し、教えを護持（ごじ）しています。またある大菩薩はガンジス河の砂の数の五万倍の弟子を引き連れ、そして四万倍、三万倍、二万倍、一万倍、千倍、百倍の弟子を率（ひき）いている菩薩もいます。そのほかガンジス河の砂の数と同じくらい、半分、三分の一、四分の一、億万分の一、千万那由他（なやた）分の一、万億、二分の一億、千、百、五十、十人、そして三、二、一人の弟子を連れている菩薩はもっと多くいます。中には弟子を従えることなく単独で来て、一人修行を楽しんでいる菩薩も数えきれません」

【二六三頁 終三行】「以上の無数の菩薩たちを数え上げようと、計算機を用いて算出を試（こころ）みて
も数え尽（つ）くすことはできません。恒河沙（ごうがしゃ）劫（こう）というガンジス河の砂の数と
いう無数の劫（こう）の年数を費（つい）やしても、決して数え尽くすことはできません。この素
晴らしい大威徳（だいいとく）を具（そな）え、正しい精進を尽くしている大菩薩たちは、一体、誰
が教化したのでしょうか？ 誰が育てられたのでしょうか？ そして誰に従って発心（ほっしん）
し、どの仏さまの教えを信じ、共鳴・感嘆（かんたん）し、どの仏さまの教えを実践してこられ
たのでしょうか？」

【二六四頁 二行】「これらの菩薩たちが尊く素晴らしい神通力を具（そな）えておられるのは、四方の
大地が震（ふる）え裂（さ）け、その中から涌（わ）き出て来たことから、推察することはできま
す。しかし世尊よ。このような出来事は、未（いま）だかつて目にしたことはありません。どう
かこれらの菩薩たちが住んでいる国の名前をお教えてください。私はあらゆる諸国を行脚（あんぎ
ゃ）して様々な経験をしてきました。このような出来事は初めての経験です。しかもこの菩薩
たちを一人として、私は知りません。忽然（こつぜん）と現れ出（い）でたその理由をどうかお教
え願います。今、ここにいる百千万の菩薩たちも、みなそれを知りたいと願っています。こう
した現象は、起こるべくして起きた因縁があるはずです。無量の徳分を具（そな）え持つ世尊よ。
我等一同の疑問を晴らしてくださいますようお願い申し上げます」

と弥勒菩薩は懇願（こんがん）したのでありました。

【十方分身仏と共にやって来た無数の菩薩が、同様の疑問を十方分身仏に問う】——

【二六四頁 終四行】ちょうどその時、十方世界の無量千万億の無数の国々からやって来た釈迦牟尼仏
の分身諸仏（ふんじん しよぶつ）は、釈尊を遠く八方で取り囲む美しい木々のもとの師子座で端座して
いました。そしてその分身諸仏に付き従う菩薩たちも、大地から涌き出（い）でた大菩薩たちの
出現を不思議に思い、その理由をそれぞれが仕（つか）える仏さまにお尋ねしたのでした。

「世尊よ。この無量無辺阿僧祇（あそうぎ）という無数の菩薩たちは、一体、何処（どこ）からやっ
て来たのでありましょくか？」

【以上の質問に対して、十方分身仏が答える】——

【二六五頁 一行】すると十方分身仏は、その問に対してそれぞれ答えたのでありました。

「善男子よ。しばらく待ちなさい。この娑婆世界に一人の菩薩がいます。弥勒（みろく）菩薩とい
う菩薩です。この弥勒菩薩は釈迦牟尼仏から必ず仏に成ると保証されている菩薩です。そして
釈迦牟尼仏の次に娑婆（しゃば）世界で仏と成れる菩薩です。その弥勒菩薩が同じ質問をしてい
ます。そして釈迦牟尼仏がその問に対してお答えを下さるはずです。みなの方たちも、その釈
迦牟尼仏のお答えを待って、しっかりと聴受（ちようじゅ）するのです」

＜＜ 本門（ほんもん） 正宗分（しょうしゅうぶん） ＞＞ ～

【釈尊が弥勒菩薩の質問に対して応答。重大事を説く宣言】——

【二六五頁 五行】その時、釈尊は弥勒菩薩に仰（おお）せになりました。

「よろしい。阿逸多（あいつた・弥勒菩薩のあだ名）。よくぞこの重大事について質問しました」

そして、多くの菩薩たちに向かってお答えになられたのでした。

／『一心に精進の鎧(よろい)を被(き)、堅固(けんこ)の意(いこ)を發(おこ)すべし』「みなの方たちよ。一切の混(ま)じり気(け)のない純粋な心で真理を受け止め、疑いを持たないという固い鎧(よろい)のような固い決意を持って、教えを信受しなければなりません。／『如來今諸佛の智慧～諸佛の威猛大勢(いみょうだいせい)の力を顯發(けんぱつ)し宣示(せんじ)せんと欲す』私は今、諸仏の智慧と自由自在な神通力、そして師子王(しおう)の如(ごと)く巨大で何ものにも負けずあらゆるものを感化していくという偉大なる大徳力(だいとくりき)によって、私はすべてを明らかにして説き示しましう」と宣言なされたのであります。

【二六五頁終行】世尊は重ねて言われました。「菩薩たちよ。純粋な心で精進しなければなりません。私はこれより重大事を説きますが、決して疑惑の心を持ってはなりません。【(偈)二六五頁終二行】

『佛智は思議(しぎ)し叵(がた)し汝今(なんじいま)信力を出(いだ)して忍善(にんぜん)の中に住せよ』なぜならば仏の智慧は、仏でなければ理解できない難しいものであるため、疑惑(ぎわく)を持たない純粋(じゅんすい)な心でなければ、真実を理解することができません。純粋で強い心、精神を統一して散乱しない定まった心で、私が説く真実をしっかりと聞くことに専念しなさい」

【(偈)二六五頁終行】「みなの方たちは、これまで聞いたことのない重大な話を聞くことになります。

【(偈)二六五頁終行】『我今(われいま)汝(なんじ)を安慰(あんい)す疑懼(ぎく)を懷(いだ)くこと得(い)ることなかれ』私はみなさんが心安らかに、安寧(あんねい)になるためにこれから真実を説きます。ですから何を聞いても驚き、疑いを持ってはなりません。／【(偈)二六六頁一行】『佛は不實(ふじつ)の語(ことば)なし～第一の法は甚深(じんじん)にして分別し叵(がた)し是(かく)の如きを今當(いままき)に説くべし汝等(なんだち)一心に聽(き)け』仏の言葉には嘘(うそ)はありません。仏の智慧は計り知れない奥深く広いもので、最高の教えも同様に深淵(しんえん)で広大なものです。普通の人にはなかなか理解できないものです。その最高の教え・真実の教えを今こそ明かします。みなさん。一心に聞くのです」

【釈尊が、久遠の昔より地涌の菩薩たちを教化しているという《真実》を説く】——

【二六六頁四行】世尊はあらためて弥勒菩薩をはじめとする菩薩たちに告げられました。

『我今此(こ)の大衆(だいしゆ)に於て汝等(なんだち)に宣告(せんごう)す』「今こそみなさんに宣言します。阿逸多(あいた)よ。大地から涌(わ)き出(い)でた無量無数阿僧祇(むりょうむしゅあそうぎ)という無数の大菩薩たちは、みなさんがこれまで見たこともない大菩薩たちです。／『我是(われこ)の娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已(えおわ)つて、是(こ)の諸(もろもろ)の菩薩を教化示導(きょうけじどう)し』じつはこれらの大菩薩たちは、私がこの娑婆世界において、私が仏の悟りを得てからのちに教化(きよけ)した者たちです。そしてこれらの者たちは、心を調伏(じょうふく/心乱れることなく、教えに従わせること)している境地の者で、仏の悟りへの道を歩むことを力強く決意した者たちです。これらの菩薩たちは、みな娑婆世界の下の虚空(こくう)に住する者で、仏のあらゆる法に精通し、しっかりと身に具えている者たちであります」

【二六六頁終三行】『阿逸多(あいた)、是(こ)の諸(もろもろ)の善男子等(とう)は～常に静かなる處(ところ)を樂(ねが)い勤行(こんぎょう)精進して未(いま)だ曾(かつ)て休息(くそく)せず』「阿逸多(あいた)よ。この者たちは、常に静かな場所で一心に修行に励むことを望み、怠けて休むことなどありません」

【他者をあてにせず、自らが主となる地涌の菩薩。その徳分】——

【二六頁終二行】『亦人（またにん）・天（てん）に依止（えい）して住せず』「また、他の人をあてにしたり、天の神々を頼りとせず、自主的で自らが主となり、他を依（より）所とするということがありません。そして、諸仏と同じ法を悟ることを常に望み、そのために一心に努力精進しています」

【(偈)二六七頁三行】『阿逸（あいつ）汝當（なんじまさ）に知るべし 是（こ）の諸（もろもろ）の大菩薩は無数劫（むしゅこう）より來（このかた）佛の智慧を修習（しゅしゅう）せり』「阿逸多（あいた）よ。この者たちは、無数劫（むしゅこう）という計り知れない過去からずっと仏の智慧を学び、修（おさ）めてきた方々です。／『此れ等（ら）は是（こ）れ我が子なり 是（こ）の世界に依止（えい）せり』そしてこの菩薩たちは、私の子であり、この娑婆世界に住している者です。これらの菩薩たちは、常に清浄な行いを実践し、多くの人々の中にあって物欲に負けることがなく、心乱れて騒がしくなることを好みません。／『所説多きことを樂（わが）わず』そして真実以外の余計なことを説くことを好みません。静かな所で修行を励むことを好み、昼夜休むことなく、一心に努力精進している方たちです。そして仏の悟りを求めるがゆえに、いままで 全員がこの娑婆世界にとどまって修行しているのであります。仏の悟りを求める志が強く、常に努力し、法を説く時は何ものにも畏（おそ）れはばかることがなく、素晴らしい説法をするのです」

【(偈)二六七頁終四行】「私がマガタ国の伽耶城（かやじょう）の近くの菩提樹のもとで悟りを得た時から、私はこの者たちを教化し、仏道を求める心を起こさせました。精進が後戻（あともと）りするようなことなどなく、すべての者たちは必ず仏の悟りを得るであります」

【(偈)二六七頁終行】『我今（われいま）實語（じつご）を説く 汝等（なんだち）一心に信ぜよ 我（われ）久遠より來（このかた）是（こ）れ等（ら）の衆を教化せり』「私は今こそ真実を説きます。皆さん、心を純粹にして私の言葉を信じなさい。じつは、私ははるか昔から、これらの菩薩たちを教化しているのです」

【釈尊が久遠の昔より教化してきた《真実》を、弥勒（みろく）菩薩らが疑問に感じる】——

【二六頁二行】その時、弥勒（みろく）菩薩およびこの法会（ほうえ）に集まっている無数の菩薩たちは、心の中で次のような疑惑を覚えていました。

「世尊がお悟りになられてから今日（こんにち）に至るまでの時間で、一体どのようにして無量無辺阿僧祇（むりょうむへんあそうぎ）という無数の菩薩たちを教化し、しかも仏の悟りを得ようとするまでに育て上げられたのであろうか？ 不可思議だ」と疑問を感じていました。

【この疑問を、弥勒菩薩が釈尊に問う】——

【二六頁五行】弥勒（みろく）菩薩は、無数の菩薩たちも自分と同じように疑問を抱（いだ）いていることを感じ取りましたので、みんなの疑念を仏さまにお尋ねをしたのでありました。

「世尊よ。世尊が太子の折に釈迦族の居城（きょじょう）である伽耶城（かやじょう）を出て、そこから程（ほど）遠くない菩提樹下（ぼだいじゅげ）において悟りを得られました。／『是（こ）れより已來（このかた）始めて四十餘（よ）年を過ぎたり』そして今日（こんにち）に至るまで四十年あまりが経（た）ちました。世尊よ。この四十年あまりの期間で、どのようにしてこれら無数の大菩薩たちを教化し、仏の悟りを得ようとするまでに育てられたのでしょうか。不可思議でなりません」

【二六八頁 終三行】「世尊よ。これらの大菩薩たちの数は、人間が千万億劫（せんまんのうこう）という果てしない時間を費（つい）やして数えても数え尽くせないほど無数です。これらの素晴らしい大菩薩がたは久遠（くおん）の昔より数限りない仏さまに仕え、そして善なる精進を積み重ねることによって、ようやく得ることができる境地に達せられた素晴らしい菩薩たちです」

【(偈)二七〇頁 七行】「これらの菩薩がたは菩薩道を確実に歩み、そして世間の汚（けが）れに染（そ）まることなく清らかな御身（おんみ）です。それはあたかも／『世間の法に染（そ）まざること 蓮華（れんげ）の水に在（あ）るが如し』『蓮の華が泥水に染まることなく美しく咲きほこっている』のと同じであります。その菩薩がたが大地から涌（わ）き出て来て、そして仏さまを恭敬（くぎょう）讃歎（さんたん）して、仏さまの御前（おんまえ）で控えておられます。その菩薩がたを、世尊がご成道なされてから今日（こんにち）までのわずか四十年間余りで教化されたというのは、とても信じ難きことです。考えようがございません」とお尋（たず）ねしました。

【《父少子老（ふしょうろう）の譬え》で、弥勒菩薩が疑問を譬える】——

【二六九頁 一行】【(偈)二七〇頁 終二行】「このことを譬（たと）えて申しますと、顔が若々しくて美しく、髪の毛は真っ黒で、年が二十五歳である人がいたとしましょう。その人が、髪が白くて、顔中が皺（しわ）だらけの百歳の老人を指さして、『これは私の子です』と言い、反対にその百歳の老人が二十五歳の青年を『これは私の父です。私を育ててくれました』と言ったとしましょう。

【(偈)二七一頁 一行】『父は少（わか）くして子は老いたる 世を攀（にぞ）って信ぜざる所ならんが如く』父親が若くて子どもが年をとっているという話は、とても信じられない話です。世界中の誰もが信じられない話です。このたびの仏さまのお話は、これとまったく同じであります」

—— 【父少子老（ふしょうろう）の譬え】

【釈尊が地涌の菩薩を教化したことを弥勒菩薩が疑問に感じる理由】——

【二六九頁 四行】『得道（とどう）より已來（このかた）其（そ）れ實（じつ）に未（いま）だ久しからず』「世尊はご成道なされてからそれほど長い時間が経（た）っていません。ところがこれらの大菩薩がたは無量千万億劫という果てしない過去から仏道を歩み実践し、一心に精進を重ねて素晴らしい境地に達した方々ばかりです。しかも無量百千万億の数にも及ぶというあらゆる三昧行（さんまいぎょう）にも自由に住することができ、大神通力を具（そな）え、いつまでも善い行いを実践し続けられる方々です。さらに善い教えを一つひとつ身に付けて行き、その結果、あらゆる人に的確に法を説き分け、巧（たく）みな説法を行うことができる方々です。そして、どのような難しい質問にも自由自在に答える能力を具えられ、何ものにも動じない強い精神力をお持ちです。人を感化せずにはおかぬ徳相を具え、気品に満ちたお姿は、／『人中（にんちゅう）の寶（たから）として、一切世間に甚（はなは）だ爲（こ）れ希有（けう）なり』まさに『人の宝』として、この地球上においては稀（まれ）な存在となる菩薩方です」

【二六九頁 終四五行】「世尊はご自身が仏の悟りを得たのちに、これらの大菩薩がたに菩提心を起こさせ、仏の悟りを得ることができるまで育てて来たと仰（おお）せになりました。世尊がご成道なされてからさほど長い年月が経（た）っておりませんが、世尊はこのわずかな期間で、これらの大菩薩がたを教化したという大偉業・大功德を成し遂（と）げられたことになります。私ど

もは仏さまのどのようなお言葉を伺っても、信じ、受持し、仏さまのお言葉に嘘があるなどとは全く思っておりません。世尊のお言葉のすべてを心底から信じ、理解させていただいております。しかし、菩薩道の歩みに入ったばかりの初心の菩薩『新発意(しんぱつち)の菩薩』が、世尊の滅後に於いて以上の世尊のお言葉を聞くと、／『信受せずして法を破(は)する罪業(ざいごう)の因縁を起さん』真意を正しく受け止めることができずに、法に対して不信を起こすという罪を犯しかねません」

【理解し難い《真実》の真意の解説を、弥勒菩薩が懇願】――

【二七〇頁一行】【(偈)二七―頁八行】『唯然(ゆいねん)、世尊、願わくは爲(ため)に解説(げせつ)して我等が疑(うたがい)を除きたまえ。及び未來世の諸(もろもろ)の善男子、此の事(じ)を聞き已(おわ)りなば亦(また)疑(うたがい)を生ぜじ』／『願わくは佛未來の爲(ため)に演説(えんせつ)して開解(かいげ)せしめたまえ～是(こ)の無量の菩薩をば云何(いかん)して少時(しょうじ)に於て教化し發心(ほっしん)せしめて不退の地に住せしめたまえる』「世尊よ。どうぞ以上のお話について、分かり易(やす)く、詳(くわ)しくその理由をお教えてください。そして私たちが今感じている疑問が晴れるようお教え願います。そのご説明を頂戴できれば、未來の世の弟子たちも、一つとして疑いを生ずることはないであります。これらの素晴らしい無数の菩薩がたを、どうして、ほんのしばらくの間で教化なされたのでしょうか。どうぞこのことを、お教え願います」と、弥勒菩薩が法会(ほうえ)の菩薩たちを代表してお尋ねしたのでありました。



いっぽん に はん 一品二半

(P386・1行／P301・3行)

法華經の要(かなめ)と言ってよい《本門・正宗分》が、『從地涌出品』の後半部分(二六五頁五行～『爾の時に釋迦牟尼佛～』)と『如來壽量品』一品すべて、そして『分別功德品』の前半部分(～二八七頁二行『～以て無上の心を助く』)に説かれていることから、《本門・正宗分》を一品と二品各品の半分を合わせたものとして、『一品二半(いっぽんはん)』と呼ぶようになりました。

『止みね、^や善男子、^{ぜんなんし}汝等^{なんだち}が此の^こ經^{きょう}を^{ごじ}護持せんことを^{もち}須^ゆいじ。所以^{ゆえ}は何ん、我が^{いか}娑婆世界^{わしゃばせかい}

に^{おのずか}自^{まんごう}ら六萬恒河沙等^{がしゃとう}の菩薩摩訶薩^{ぼさつまかさつ}あり』 (二五八頁 五行)

お釈迦さまの決然(けつぜん)たる気魄(きはく)が感じられます。～ 救いを他(た)に求めようとしがちな、(他に依存心を持ちがちな) われわれ後世(こうせい)の人間に対して活(かつ)を入れるために おっしゃったものと、感じ取らねばなりませんまい。

地涌の菩薩とは―（大衆唱導の首）

(P383・6行/P299・6行)

『一一の菩薩皆是れ大衆唱導の首なり』 (二五九頁 三行)

― この菩薩たちは、多くの人々の先頭に立って、大衆を教え導く人たちです。

地から湧(わ)き出した菩薩というのは、苦しみや悩みの多い現実の生活を体験し、その中で修行を積み、世俗の生活をしてながら高い悟りの境地に達した人々のことを言うのです。「自ら苦しみや悩みを体験し、そこを突き抜けて来た人」は、本当の力を持っています。そんな人こそ、人を教化する力を具えているのです。

そういう地涌(じゆ)の菩薩に対して、この娑婆世界を任せられたということは、つまり、この世界はその住人である我々自身によって清浄にし、平和にし、我々自身の手で幸福な生活を築き上げていかねばならないのだ―― という教えにほかなりません。

自分たちの寂光土(じゃくこうど)は、自分たちの責任において築き上げなければならない。自分たちの幸福は、自分たちの努力によって作り出さなければならない。― なんと力強い、積極的な教えにほかなりません。

本化・迹化の菩薩

(P391・1行/P305・終3行)

仏さまと同じような三十二相をそなえ、身から金色(こんじき)の大光明を放っているというのですから、殆(ほと)んど仏に近い菩薩であるということがわかります。仏教学上では、久遠実成の本仏によって教化された菩薩であるとして、〈本化(ほんげ)の菩薩〉と称しています。

それに対して、お釈迦さまによって教化された菩薩を〈迹化(しゃっけ)の菩薩〉と呼んでいます。

本化の菩薩は待機の菩薩

(P391・終2行/P306・7行)

すでに久しい前から、悟りを開いていた人たちです。そして虚空(こくう)に住していたというのです。娑婆世界救済への発動に、待機していたわけです。

実践者として具現する菩薩

(P392・8行/P306・終2行)

大地をメリメリと引き裂(さ)いて発来(はつらい)する・・・それは大変な力が必要です。この菩薩がたは、そういった力の持ち主でありました。～ 現実社会におけるたくましい実践力を持つ菩薩であることを意味しているのです。～ 実践力に満ちた宗教者であり、指導者であるわけです。～

現実の世界に住む人間を救済するためには、どうしても汚(け)れや濁(にご)りに満ちた現実生活を体験し、その体験をとおして人間を指導し、教化しなければ、本当に救うことはできません。～ そうしてこそ、本当の人間を指導し、引き上げることができるのです。

げんじつせいかつ たいけん 現実生活の体験あってこそ

(P393・3行/P307・6行)

大地をくぐり抜けるということには、現実社会の生活を体験するという意味があります。
～ 大衆のなかに飛び込み、その苦しみをじかに触れる必要があります。人間の弱さ、醜(みにく)さを、肌を感じ取る必要があります。そうしてこそ、本当に人間を指導し、引き上げることができるのです。

さべつそう とお びようどうそう 差別相を通して平等相へ

(P394・6行/P308・3行)

もうひとつ角度を変えて、このことを観じてみますと、これは、我々のものの見方の発展する過程を教えているものと受け止めることができます。

① はじめ娑婆世界の下の虚空(くう)に住していたというのは、つまり《空の悟り》そのものの中にいたということです。《空の悟り》とは、《人間の本質は仏性である》という真実です。

② ところが、現実の人間にあらわれている様々な差別相を直視し、その差別相がどこから生じてくるのかということを見極めるならば、そこに生きた人間の救いの道が開発されるでしょう。この《現実の人間の差別相を見きわめる》ことが、大地をくぐり抜けることにほかなりません。(もし差別相を無視して、ただ人間の平等相だけを観じている人があったとしたら、～ ただその人自身が立派であるというだけであって、いっこうに世の救いとはならないのです。)

③ 大地をくぐり抜けて出現したこの菩薩がたが、虚空に浮かぶ多宝塔を礼拝してから、虚空にとどまることが述べられています。

これは何を意味するのかと言いますと、再び《仏性の平等》を観ずるということであります。差別相を直視することにとどまってはいは、ついその差別相にとらわれがちになります。ですからもう一度そこを突き抜けて、人間の本質である仏性を見なければなりません。
(もう一度《仏性の平等》を観じとるということが大切になります)

こういう仏性観・平等観を得た時、はじめて《廣大無辺な慈悲心》が生まれ、すべての生あるものの救済者としての資格が完成するわけです。

※「智慧」とは。「五観」とは(真観・清浄観・广大智慧観・悲観・慈観)

このように、人間に対する見方を、①本質の『平等相』から、②現実の『差別相』へ、それから再び③差別相を突き抜けた『本質の平等相』へと深めていく筋道(「下方の虚空」⇒「大地」⇒「娑婆世界の虚空」)という過程を象徴させてあるわけです。

※『諸法如實(しよほうにょじつ)の相を觀じ、亦(また)不分別(ふぶんべつ)を行ぜざる、是(こ)れを菩薩摩訶薩の行處(ぎょうじょ)と名(なづ)く』(『安樂行品』 二四一頁終二行)...

《^{しやうい}思惟のひととき ①》

「自ら苦しみや悩みを経験し、そこを突き抜けて来た人は、本当の力を持っています。そんな人こそ、人を教化する力を具えているのです」と庭野開祖は説示します。

— これまで多くの苦悩・悩みを持っていた（持っている）私たちだからこそ、「人を教化する力を具えているのだ」と説かれていることについて、あなたはどのように感じますか。考えてみましょう。

《^{しやうい}思惟のひととき ②》

①ただ人間の平等相だけを観じているだけでは、いっこうに世の救いの力とはならない。しかし②現実の人間にあらわれている様々な差別相を見極めるならば、そこには、生きた人間の救いの道が開発される。ところが差別相を直視することにとどまっていたら、その差別相にとらわれがちになってしまいます。そこで③平等相を観じ、再び〈仏性の平等〉を観ずるならば、はじめて広大無辺な慈悲心が生まれ、生きた人間を救うエネルギーとなり、すべての生あるものの救済者としての資格が完成すると庭野開祖は説きます。

この①本質の『平等相』⇒ ②現実の『差別相』⇒ ③差別相を突き抜けた『本質の平等相』へと深めていく筋道を、あなたはどのように受け止めますか？

『^{きき}先より ^{ことごと}盡く ^{しや}娑婆世界の下、^{した}此の界の ^こ虚空の中に在って ^{かい}住せり。是の ^{こくう}諸の ^{なか}菩薩、^あ ^{じゅう} ^こ ^{もろもろ} ^{ぼさつ}』

『^{しや}釈迦牟尼佛の ^に所説の ^{おん}音聲を ^き聞いて ^{した}下より ^{ほつらい}發來せり』 （二五九頁 一行）

— この菩薩たちは、ずっと前から娑婆（しやば）世界の下虚空（こくう）にいたのですが、釈迦牟尼仏のお説きになった言葉を聞いて、急いでみもとに参ってきたのです。

つまり、前の世において既（すで）に迷いを離れた境地にいたにもかかわらず、この娑婆世界を救うために、わざわざこの世界の苦しみや悩みを経験し、その苦しみから抜け出して来たのだということです。この「わざわざ苦しみを経験する」ということは、非常に大切な過程であって、前にも申した通り、それでなければ本当に娑婆の人間を救う神力は身に付かないのです。尊い教えです。

《^{しやうい}思惟のひととき ③》

「この地涌の菩薩たちは、娑婆世界を救うために、『わざわざこの世界の苦しみや悩みを経験』し、真剣に努力して来たということです」と庭野開祖は説きます。

— 私たちが抱える「苦しみ・悩み」は、「この娑婆世界を救うために、わざわざ経験すること」だと説かれていますが、これは先の《^{しやうい}思惟のひととき ①》に通ずるものです。このことをもう一度、深めてみましょう。

※『^こ是の ^{しよにんら}諸人等は ^{すで}已に ^{かつ}曾て ^{みもと}十萬億の ^{だいがん}佛を ^{あわれ}供養し、諸佛の所に於て大願を成就して、衆生を愍むが故に

此の人間に生ずるなり』 （二〇三頁 一行）

ほんげ し だいぼさつ じょうしゅしょうどう し
本化の四大菩薩— (上首唱導の師)

(P411・1行/P321・1行)

『一を上^{じょうぎょう}行^{なづ}と名け、二を無^む邊^{へん}行^{ぎょう}と名け、三を淨^{じょうぎょう}行^{なづ}と名け、四を安^{あん}立^{りゅう}行^{ぎょう}と名く。

是^この四^{ぼさつ}菩薩^そ其^{しゅちゅう}の衆^{おい}中^{もつと}に於^こて最^{じょうしゅしょうどう}も爲^しれ上^し首^し唱^し導^しの師^しなり』(二六〇頁 八行)

—— 上行、無邊行、淨行、安立行の四大菩薩は、あらゆる菩薩の最上位にあり、先頭に立ってみんなを導く指導者であります。

「上行」(初転法輪印) — 『至上の法を行ずるもの』(仏道無上誓願成)

「無邊行」(与願印) — 『無限の行をするもの』(法門無尽誓願学)

「淨行」(合掌印) — 『清浄な行をするもの』(煩惱無数誓願断)

「安立行」(降魔印) — 『確実な行をするもの』(衆生無辺誓願度)

これらの菩薩はすべて『行』と名の付く菩薩・実践の菩薩であります。迹門の教えで説かれた『諸法実相』の智慧を、現実生活に現わし、『仏性平等』の真実を慈悲の行いに実践する行動者であります。

『是^この諸^{もろもろ}の衆^{しゅじゅう}生^せは世^せ世^せより已^{このかた}來^{つね}、常^わに我^けが化^うを受けたり。亦^{また}過^か去^この諸^{しよぶつ}佛^{おい}に於^こて

供^く養^{よう}・尊^{そん}重^{じゅう}して諸^{もろもろ}の善^{ぜん}根^{こん}を種^うえたり。～即^{すなわ}ち皆^{みな}信^{しん}受^{じゅ}して如^に來^{らい}の慧^えに入^いりにき』

(二六一頁 七行)

ずいき こころ
随喜の心

(P424・3行/P331・終2行)

随喜の心を発(おこ)したのを仏さまがおほめになったことも、大事なことです。～(教えられた理法を)理解すると同時に、教えに随喜する心を起こしてこそ、実践への大きなエネルギーが生ずるのであります。～ 随喜の心を起こさせることが、宗教の宗教たるゆえんであり、世を救う原動力となることを、説法者はよくよく心得ていなければならないのです。

『善^{ぜんざい}哉^{ぜんざい}善^{だいおう}哉^せ大^{そん}雄^{もろもろ}世^{しゅじゅうどう}尊^け 諸^どの衆^や生^{われらずいき}等^き 化^や度^すしたもうべきこと易^{やす}し～我^{われ}等^{われ}随^{ずいき}喜^きす～

善^{ぜんざい}哉^{ぜんざい}善^{ぜんなん}哉^し、善^{なんだち}男子^よ、汝^{にょらい}等^{おい}能^{ずいき}く如^{こころ}來^{おこ}に於^こて随^{ずいき}喜^きの心^{こころ}を發^{おこ}せり』(二六二頁 一行)

『汝^{なんだち}等^{まさ}當^{とも}に共^{いっしん}に一^{しゅうじん}心に精^{よろい}進^きの鎧^{きんご}を被^{こころ}、堅^{おこ}固^ぎの意^ぎを發^うすべし。～疑^ぎ悔^けあること得^うるこ

となかれ佛^{ぶつ}智^ちは思^し議^ぎし叵^{がた}し 汝^{なんじ}今^{いま}信^{しん}力^{りき}を出^{いだ}して忍^{にん}善^{ぜん}の中^{なか}に住^{じゅう}せよ』(二六五頁 六行)

信ずることの意義

(P447・1行/P350・終6行)

そこで「今のところはとりあえず、私の言葉を信じなさい」と仰せられるのです。じつは、この「信ずる」ということこそ宗教なのです。～ お釈迦さまは、ここで「何はともあれ、『純粋な心』でひたすら私の言うことを信じなさい」と仰せられています。～我々は虚心にそれを信ずればいいのです。どうしても信ずる気持ちになれない人は「縁なき衆生」です。仕方がないから、信ずる気持ちになるまで待つほかはありません。

《患惟のひととき ④》

「我々は虚心に(素直な心で純粋に)信ずればいいのです」と説かれています、
— 私は日ごろの信仰生活において、経典に書かれている仏さまの言葉や、庭野開祖、庭野会長の言葉を、素直に「信じて」いるのでしょうか？ 振り返ってみましょう。

『亦人・天に依止して住せず』 (二六六頁 終二行)

人・天に依止せず

(P459・4行/P360・1行)

「人」すなわち他人を頼りにすることもなく、「天」すなわち神を頼むこともなく、自分自身をよりどころとし、法(真理)をよりどころとしている信仰姿勢です。

～〈自灯明・法灯明〉の教えであって、千古不易(せんこふえき)の人生訓です。

※「サンガ」という集団の中にいる時だけ菩薩行を実践して、「サンガ」の枠から離れたところで、菩薩行を実践できているか？ 置かれた環境はどうであれ、自らの信仰として自分が置かれたところで自らが主となって、教えに基づいて菩薩行が実践できているか？

《患惟のひととき ⑤》

「地涌の菩薩たちは『人を頼りにすることもなく、神に頼むこともなく、自分自身と法(真理)をよりどころ』としている」と説かれています。
— まさに〈自灯明・法灯明〉の姿勢そのものだと言えます。では、この姿勢と私の信仰姿勢と比較すると、どうでしょうか？ 振り返ってみましょう。

《庭野開祖 六つの誓い》

- (1) これからは、けっして嘘はつくまい。
- (2) 力いっぱい働こう。
- (3) 他人の嫌がることを進んでやろう。
- (4) 他人と争わぬこと。どんなひどい目に会っても、神仏のおぼしめしと思って辛抱すること。
- (5) 仕事をするとき、人が見ていようといまいと、陰日向(かげひなた)なくはたらくこと。
- (6) どんなつまらない仕事でも、引き受けた以上は最善を尽くすこと。

ほとけ こ じしん 仏の子である自信

(P463・5行／P363・終4行)

自分をどう見るか…それによって、他人や世間に対する態度が、どうにでも変わってくるものです。～ 自分は久遠本仏の分身である、子であるという意識に徹してしまえば、久遠本仏の慈悲がその人に満ち満ちるのですから、これぐらい力強いことはありません。 なにものをも憚(はか) ることはありません。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑥》

庭野開祖は、「自分をどう見るか…それによって、他人や世間に対する態度が、どうにでも変わってくる」、「自分は久遠本仏の分身である、子であるという意識に徹してしまえば、久遠本仏の慈悲がその人に満ち満ちる」と説いています。

— 至らない自分が「久遠本仏の子」だと自覚さえすれば、自分自身の中に(身の回りに)「久遠本仏の慈悲」が満ち満ちるという庭野開祖の説示を、あなたはどのように受け止めますか? かみ締めてみましょう。

『われいまじつご と なんだちいっしん しん われくおん このかた こ ら しゅ きょうけ
『我今實語を説く 汝等一心に信ぜよ 我久遠より 來 是れ等の衆を教化せり』

(二六七頁 終行)

ふ しょう しろう たと 父少子老の譬え

(P476・終3行／P374・終5行)

ほう は ざいごう 法を破する罪業

(P482・3行／P378・終3行)

法を破するというのは、教えを害(そな)うことです。それは単に自分だけが教えを信ぜず、教えにそむくというわけではありません。～ 他人がそれを信じようとするのを見れば、悪口を言ったり、反対理由を言い立てたりして、それをやめさせたがるようになります。～ 多くの人々の菩提心の芽を摘み取り、正しい教えの広がるのを断ち切ってしまうからです。 それこそ、法を害(そな)う最大の罪の行為と言わなければなりません。

『しんじゅ ほう は ざいごう いんねん おこ
『信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん』 (二七〇頁 一行)

《^{しゆい}思惟のひととき ⑦》

『悪口を言ったり、反対理由を言い立てて、他人が信じようとするのを妨害する』『人の菩提心の芽を摘み取る』ことは法を破する罪業であり、法を害(そな)う最大の罪だと庭野開祖は説いています。

— 「人の精進、菩提心の芽を摘む」ことの一つに「法座で語られた内容を口外する」ことも上げられます。さて自分を含めて、自分の周囲でこうした『法を破する罪業』が思い当たるか? 見当たらないか? 振り返ってみましょう。

『^{せけん}世間の^{ほう}法に^そ染まざること^{れんげ}蓮華の^{みず}水に^あ在るが^{ごと}如し』 (二七〇頁 七行)

^{れんげ}蓮華の^{みず}水に^あ在るが^{ごと}如し

(P485・5行／P381・8行)

菩薩の道すなわち大乘の教えをすっかり身につけ、俗(そく)世間のなかに住みながら、俗世間のさまざまな汚(け)れに影響されないのは、ちょうど蓮の花が泥水に咲いて、しかも清らかで、美しく、いささかの汚(け)れもないのと同様であるということです。

菩薩の性格をじつに簡潔・適確に表現した名句といえましょう。

《^{しゆい}思惟のふいかえい まとめ》

今日の『從地涌出品 第十五』の学びを通して、何を学び取ったか？ (または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌